
スイッチ！

ハシルケンシロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スイッチ！

【Nコード】

N5108B

【作者名】

ハシルケンシロウ

【あらすじ】

プロ野球団沖縄シユバルツのクローザー、小野学人。ワールドベースボールクラシック決勝戦で彼とその家族を襲った悲劇と、それを乗り越えようとする家族達の奮戦記。

一球目 発進、不沈潜水艦小野学人号

小野学人。彼は、プロ野球団沖縄シユバルツのクローザーだ。本来なら彼は打席には立たない。何故ならシユバルツはパ・リーグだからだ。しかし、彼は打席に入ってしまった。このゲームは、パ・リーグ公式戦ではなく、ワールドベースボールクラシック決勝戦であるからだ。

決勝の相手は、王者アメリカ。メジャーリーグからスター選手をかき集めたまさしく優勝候補の筆頭なのであるが、そのメジャー代表を日本のスクイズ攻めが凌駕した形の5対3というスコアで6回裏を迎え、日本の守護神小野学人投手のおでましとなった訳である。

第8回、ワールドベースボールクラシック。開催国は敵国アメリカだ。学人のおでましを盛大なブライニングで出迎える。どよめくスタジアムのグラウンドを悠然と歩いて学人がマウンドへと向かう。その威風堂々としたたたずまいは、打ち込まれて轟沈することなど想像もつかないほどの神々しさをかもし出し、その空気を日本ナイン、そして、三塁側スタンドに浸透させ、かつ、充満させていく。

現人神のオーラによって、必勝ムードが漂い始めたクラシック記念スタジアムの三塁側から、

「パパ頑張れー！」

と一際大きな声援をあげる一団があった。真幸、深幸の双子と美里。学人を大黒柱とする小野家の連中である。

真幸は、カクテル光線に照らし出された自分の父親に心から

《パパカッコいい》

と、尊敬の眼差しを向けている。新聞によると、学人は「ふちんせ

んすいかん】らしい。未だ四歳の真幸にはあまりよく解らない言葉だったが、どうやらこの言葉はとても面白い言葉のようだ。学人も美里も見るとなり大笑いしていた。

幼稚園で将来の夢を語るとき、真幸はいつも、

「パパみたいなの、凄いピッチャーになる！」

と答えている。それ程学人の存在感は幼子の心を鷲掴みにして、放すことがなかった。子供ながらに一人の漢に心を奪われてしまった真幸は、父親を見るのとはまた違った目付きでその姿を見つめている。

学人は、マウンドへと向かっている。【不沈潜水艦】この様な摩訶不思議な通り名を賜っている理由は、単純に彼がサブマリン投法であり、そして、滅多に打ち込まれて轟沈することがないからだ。だから、潜水艦【小野学人号】は、沈まないと評されているのである。

四方八方から降り注ぐカクテルライトを浴びながら目標地点へと到達した不沈潜水艦は、標的に向けて力の無い魚雷を適当に打ち込む。そして、遂に米軍の艦隊を迎え、作戦将校からのゴーサインが出る。アンパイアの右手が、

「プレイ！」

のジャッジと共に拳がったのである。ひとしきり投球練習を終えた学人は、シュバルツ入団以来苦楽を共にしてきた盟友玉木知昭捕手からのサインを待つ。アメリカ代表の打順は8番から。捕手、投手、業師と続く打線である。

《さすがにこの辺は大丈夫だろ……》

学人はここを、手を抜いて良い部分であると判断した。

男性場内アナウンスであるスタジアムDJが、

「バットティングファースト キャッチャー ジョニー・アンダーソン」

と流暢な英語で告げる。打席のアンダーソンからは何のプレッシャーも感じない。知昭からは、内格高めにストレートを外せとのサインが来る。高校まで共に野球をプレイしていた兄匠人直伝である半身からのwindアップを採り、不沈潜水艦小野学人号は発進した。

初球は内側にウエスト。これは、故意に危険球を投げることを意味している。このゲームがセ・リーグ公式戦であるならば、たったの一球で危険投球退場となるところだが、この試合はそうではない。ましてや、日本プロ野球連盟主催のゲームでもないのだ。そんなルールは無い。

頭と前足の爪先をマウンドの上に残すような形で体を捻り、上半身を深く沈めながら尻から前方に倒れていく。

程良く頭と尻が沈んだら、すかさず前足（軸足）を前へと投げ出して、体を沈める動作によって作り出した運動エネルギー及び位置エネルギーをのせる。そして、前足の接地と同時にその爪先をホームベース方向へと向ける。走者がいるときにこの動作を誤ると、たちまちボーク（ルールに従っていない投球動作）とみなされてしまうため、注意が必要だ。ボークが出た時にいた走者は、問答無用で次の塁に行けるのだ。

敵艦へ向けての一発めの魚雷。ストレートという魚雷は、狙い通りアンダーソンの顔スレスレの位置に向かっていった。

アンダーソンが、クソ真面目にすぐに避けに入る。正直助かった。ここでぶつけて余計なランナーを出してしまつては、失点に繋がる可能性が出て来る。【ランナーを出したら点を取られたと思え】兄匠人からの教えだ。

アンダーソンは、まるで何か見てはならないものを見てしまったかのような表情で、後方へと退け反っていく。そして、球場全体から吹き荒れる悲鳴と怒号の中、倒れ込む様に後退りながら、バツターボツクスから……、外れた。

観客席から吹き荒れるブリザード級に冷たい雰囲気の中、アンダーソンから放たれる呪祖の視線と、アンパイアから放たれる射抜かれるような視線が学人に突き刺さる。たったの一投で、ほぼ全てのオーデイエンスを敵に回す形になってしまったが、そんなものはこの先4イニングでいくらでも埋め合わせができる。不沈潜水艦小野学人号には、間違い無くそのぐらいの性能は備わっていた。

ボールカウント ワンボールナッシング

前途多難な出航ではあったが、不沈潜水艦小野学人号はクラッシュ記念スタジアムという作戦ポイントに於いて、着実に【米軍の反撃を許すな】という任務を遂行し始めている。

ゲームスコア

6 回裏

5 対 3

一球目 発進、不沈潜水艦小野学人号（後書き）

次回予告！

真幸です（＾０＾）／

ボクのパパ、アメリカを抑えられるのかなあ

（？―？）

頑張ってほしいなあ

○（＾－＾）○

みんな文句言ってるけど、パパ凄いから絶対みんな好きになつてくれるもん○（＾－＾）○

次回 二球目 バク進、小野学人号

ボク、大きくなったらパパと一緒にシュバルツを世界一にするんだ！○（＾－＾）○

って、そんな決定戦は無いんだってさ（TOT）

キリンカップみたいなのが野球にもあればいいのに（-_-#）

じゃあね(^ o ^) /
ボク、真幸だよ(^ - ^) o

二球目 曝進、小野学人号

スコア

6 回裏

5 対 3

打席に迎えているのはアメリカ代表 8 番打者アンダーソン。メジャーでの昨シーズンの成績は、2 割 1 分 3 厘、12 本塁打。イメージとしては、典型的な守備の人だ。

マウンドには、この大会で何度も敵軍を沈めてきた【不沈潜水艦】小野学人。この試合先発した大榎貴志が、5 回に突然乱れてしまい、いつもの習慣で 3 回から肩作りを始めていた学人がいつもより早くマウンドを踏むこととなった。

ボールカウントは、アンダーソンの顔スレスレをかすめ通っていくビーンボール（頭にぶつかる可能性のある危ない球）によるワンボールナッシング。たったの一投で球場に張り詰めた空気を作ってしまった。

激しいブーイングが地響きのごとく鳴り響く中、学人の体がまたゆっくりと地面を這うように沈んでゆく。

相棒からの指示は、外低めギリギリのスローカーブ。学人としても反対の意思はない。顔スレスレの速い球は打者の意識を内側に引き付け、意識的なストライクゾーンを通常より内側にずれているように誤認させる効果がある。

アンダーソンにとっては外目のボール球。しかし実際には外低め

ギリギリのストライク。さらに、ヒョロヒョロと頼り無さ気に飛んで来るスローボールなのである。打たれるどころかスイングされる心配すら殆んど無い、組み立て（打者を打ち取るまでの投球計画）の王道であるといえる。

ボールは学人の手元から離れ、なだらかな弧を描きながら知昭のミットへと飛んでいく。そして、そのスローボールはまるで磁気に吸い寄せられる鉄塊であるかのように寸分の狂いもなくミットに収まった。

ボールカウント、ワンエンドワン。

三発目の魚雷。今度の目標は、あわよくばアンダーソンを沈めようとするもの。だが、それはあくまでも【あわよくば】のレベルであり、真の目的はやはり彼を混乱の渦に叩き込むことにあった。

外れていると思っていたボールでストライクを取られる。それだけでも十分に混乱させることが出来るのだろうが、もっと惑わせることができれば、この後の打席でも打たれることが無くなるのである。

狙うべきポイントは内側高めの若干内側に外した速球。先程のスローカーブ同様、ストライクゾーンがずれてしまっているアンダーソンにとって、そのボールはストライクなのである。

ボールが、地を這うような軌道で繰り出される手元から放たれる。

狙った位置へとボールは進んでいく。残る問題は、アンダーソン

がどう動くかだ。 軀をねじり、バットを握る両手に一段と力を込めてきた。

《打つ気だ》

その気迫がまるですぐ側で突然空気が膨張してしまったかのようなプレッシャーを伴って押し寄せて来る。

学人の速球は138キロ。決して手も足も出せないスピードではない。いや、それどころかメジャーリーガーにとっては打ち頃極まるスピードであるといえる。だからこそ、ルアーに食い付くブルギルのように、この釣り球（打ちやすいように見えて、実は物凄く打ちづらい球）に手を出してしまったのだらう。

アンダーソンの打球はバットの根本に当てただけの内野ゴロとなり、学人が拾って一塁へ送った。

ワンナウトランナー無し。ゲームセットまで、あと11人……。

アンダーソンをたったの三球で打ち取る鮮やかな手並みで三塁側のオーディエンスを取り戻した学人は、次なる攻撃目標となる

『バッティングセカンド ピッチャー マイク・シユタイナー』

へと意識を向ける。

ピッチャーの仕事は相手に点をやらないことと、バント（予めバントを寝かせてボールに当てやすくする打ち方）をすること。これは、高校時代の恩師からの指導であるのだが、この場面でのバントはさすがに有り得ないだろうと判断した学人は、自ら知昭に【三球勝負（三球で三振に打ち取る）】のサインを送り、その返事を待つ。

知昭の首振り人形のような、特徴的な頷きを確認して、三球勝負のためのサインのやりとりを始める。

気分が乗っている。本来は、8回、9回の二イニングに投げるだけで済むはずの自分が、6回から投げているという違和感すら、全くと言っていいほど気にならない。

《勝てるぞ、今日は勝てる！》

全く根拠のない自信ではあったが、予感めいたものが脳裏をかすめた。

内側の高めと低めにシュートとスライダーを散らした後、外低め一杯に速球。シュタイナーはもともと振るつもりが無かったのだから、それを【動かざること山の如し】を体現しているかのように威風堂々と見送り、三球三振となった。ピッチャーとは、唯一打てなくても文句を言われないポジションなのだ。

ツーアウトランナー無し。ゲームセットまで、あと10人……。

続く打者は、

『バツティングガード セカンドベースマン クロノ・ムーラン』

ムーラン。ヨーロッパ競馬の短距離レースにムーラン・ド・ロンシャン賞（1600m ジーワン）というレースがあるため、競馬好きの学人としてはどうしても足が速いというイメージを持ってしまふ名前だが、実際にムーランの足はかなり速いらしい。

100m、9秒96。真剣に陸上競技に専念していたならば国際大会であってもメダル獲得は確実に、もはや何色を取って来るのかに話題は集中していたことだろう。まさにクロノの名前通り、時空を超越した脚の持ち主なのである。

そんな脚の現人神を相手に回し、自分は何をすべきなのかを自分に問うてみる。

……、《打ち取るべき》

勿論答えはこれしかない。そのための組み立てを知昭と共に慎重に考え始めた。

スコア

6回裏

ツアアウトランナー無し

5対3

二球目 曝進、小野学人号（後書き）

次回予告！！

学人でーす〇（^-^）〇

いやあ、9秒96ですよ、9秒96！

剣持先輩の10秒14でも驚いてたのに、上には上がいるもんだなあ……（〇）

さて、今回はヤツとの対決が始まります〇（^-^）〇

次回 スイッチ！

三球目 ムーラン包囲網

いくらいい脚を持ってたって、出れなきゃ宝の持ち腐れなんだよ

えっ!?

出られたら確実に一点入る!?

それは言わないでー (TOT)

以上、学人でしたあ (^ o ^) /

三球目 ムーラン包囲網

ワールドベースボールクラシック決勝戦、学人は今、6回裏、ツアアウトランナー無しで打席にアメリカ代表1番打者、ムーランを迎えている。なぜ陸上競技ではなく、野球に走ったのかが不思議なほどの、メダリストレベルの短距離ランナーを相手に、どう組み立てれば塁に出さずに済むのか知昭と作戦を練り始める。

個人的には、緩い球を幾らか続けて、速い球で打ち取りたいが、知昭はどう考えているのだろう。とりあえず、この組み立てで良いかどうかをブロックサインで訊いてみた。

返答は、無かった。知昭にも、彼なりの組み立てがあるだろう。おそらくは、それと大きくかけ離れているからなのだろうが、球種とコースを要求するサインは、まだ出て来なかった。それどころか、マスクを外してアンパイアにタイムを要求している。

知昭が、苦虫を噛み潰したような表情でマウンドへとやって来る。その足取りも非常に重く、まるで幾重にも張られた結界を強行突破しているかのようなようだ。

知昭と共にフィールドを駆けること、十余年。初めはウマが合わなかったが、今では彼のリードを信頼しきっている。全てを任せるのはプライドか許さないとこころはあるが、ここぞと言うときの組み立ては、任せっきりにしたほうが上手く行くということも理解していた。

だが、どうしてもこのタイミングでマウンドまでしゃしゃり出てきたことが気にくわなかった。今の組み立てのどこに文句があるというのだろうか。

「何しに来やがったんだテメーはって顔しないでください。組み立て自体に文句言いに来たものではありません。」

ちよつと……、私の計画を聞いて頂こうと思っただんですよ」

というのがここまでやってきた理由らしい。グラウンド上の諸葛孔明と囁かれるID野球の申し子、玉木知昭が、マウンド周辺に、内野手のみならず、外野手までも集めてしまった。

「……、みなさん、驚かないで聞いてください。」

当然ギャグではないし、相手をなめてるわけでもありません。

……、ムーランに対して9人内野を敷こうと思っんです」

9人内野。そのシフトは、高校野球でよく見掛ける、スクイズ対策として敷かれるサードとショートがマウンドより前で守り、レフトが、ショートの前位置に入る【7人内野】の究極バージョンだ。つまり、ファースト、セカンド、ショート、サードを全てマウンドより前に押し上げ、レフトをサードの前位置に、センターをショートの前位置に、ライトをセカンドの前位置に置いて、ピッチャーがファーストベースのカバーに走るという、絶対にバントをさせないための最上級のバントシフトなのである。

だが、このシフトを敷いてしまうと、

「外野に誰も居ねえんだから、外野まで持ってかれたら終りだろ」

ということになる。まだ三点差があるため、あまり痛手にはならないのかも知れないが、ムーランの足を考えると、ほぼ間違い無くランニングホームラン（フェンスを超えない打球で、打った選手がホームまで帰ってくる）になってしまふのだ。

集まった選手を代表して学人が放ったこの問いに、

「まあ、黙ってお任ください。もしムーランに外野まで持ってかれるような事があったら、貴殿方全員に高級フレンチのフルコースを奢って差し上げますよ」

得意満面の笑みで知昭が答えた。この場に限って見れば、かなり不適な笑みに思える。

だがそれは、確実に打ち取ることが出来るという確固たる自信の現れでもあるのだ。長年共に戦ってきた戦友であるからこそ、学人にはそれが、痛いほどよく理解できていた。

「高級フレンチにありつきたいのでしたら、私の言った通りにしてください。

とは言っても、食する確率は、極めて低いとは思いますが……。
では、守備に戻りましょう」

孔明軍師のこの言葉に促され、学人が両手を挙げて解散を指示する。軍師も、定位置であるホームベース後方へと帰っていく。定位置に帰らなかつたのは、他の野手連中だ。7人全員が、インフィールド（内野）に固まっている。どうやら、連中も覚悟が決まったようだ。

ムーランのシーズン通算打率は・288なのだが、その8割がバントヒットである。残った2割もポテンヒットであるらしく、確かに一見するだけでは、外野まで打球が飛ぶ確率は極めて低いと思われる。

だが……、

それは、メジャーリーガーを相手に回した数字であり、決して、プロ野球選手を相手にした数字ではないのだ。問題は、学人のパワーでもムーランの飛距離をこのレベルまで抑えることが出来るのかということに尽きる。ことに、パワーの面だけ見た場合、アングロサクソン系と内モンゴル系（学人）は、別な生き物であるとの声さえ上がっている。この体力、筋力差を埋めることが出来る組み立てが要求されるのである。

しかも、失投、即、ランニングホームランという状況で。

スタジアム全体が、何とも摩訶不思議な奇声の渦に包み込まれた。漫画や小説の世界でしかお目にかかることの出来ない【9人内野】という守備シフトを、彼等は今、この現実世界において目の当たりにしているのである。至極当然の反応であると言えるだろう。

この異次元空間を作り出した犯人からの最初の要求は、外側一杯低めのシンカー（右投手が投げる、右側に曲がりながら沈む球）だった。

首を縦に振る。

半身のウィンドアップから【不沈潜水艦】が沈んでいく。学人がモーシオンをとっている間に、グラウンド上の諸葛孔明がムーランに対して野村監督ばりの囁き戦術を仕掛けているようだ。

両足の爪先と頭を極力マウンドプレートの上に残すような体勢で尻だけ斜め45度前方に沈めていくため、学人のユニホームの太股やふくらはぎ辺りがはち切れんばかりに捻れる。見つめる先では、囁き戦術が成功したのかムーランが、学人がモーシオンを起こしているにも関わらず、悪魔のような目付きで知昭のことをチラチラと気にしている様子だ。

手が地面にぶつかるとは思えないかと投げるときに心配されている極端なサブマリン投法から、第一球が放たれた。

学人の手から離れたボールは、予定通りのコースに飛んでいる。

打席のムーランが、指先に力を込めたのを学人は見逃さなかった。明らかに打つつもりのようだ。

ボールは、右側に滑り落ちながら18m強をゆったりゆったり、ゆっくりゆっくりと飛んでいく。

蠅でも止まってしまうような超スローボールに、ムーランのバットが襲いかかってきた。

バットは、ボールの上っ面をかすめるに止まり、その結果として産み出された打球はボテボテなゴロとなって、ファールグラウンドへと転がっていく。

二球目を投げるために、学人がマウンド上で身を踊らせ始めた。調子が良いときのアンダーハンド投手のモーションは、踊っている様に見えるという。実際に学人本人も、自身から沸き上がる溢れんばかりの躍動感に、心を踊らせていた。

いつぞや、某野球雑誌のインタビューを受けた際に、

「僕今ねえ、三国志にハマっちゃったんですよ。好きなキャラですか？ 呉の周瑜と孫策が、何気に気に入ってますね」

と答えたことから【不沈潜水艦】の他に、【マウンド上の美周朗】との異名も賜っている。周朗というのは周瑜のニックネームで、正史（王朝によって正式に書かれた歴史書）三国志にはっきりと美青年であると書かれている程のイケメンであったため、周りから、次第に本来の周朗に美を付けて呼ばれることになったらしい。

学人は今、大きな合戦前に必ず周瑜が諸将を集めて景気付けのために舞っていたという剣の舞と、自分がマウンドで舞っている投球

の舞を重ね合わせていた。

《ツラは周瑜に及ばねえけど、舞は結構良い勝負になってんだろ》
完全に、自画自賛、自己陶醉の世界に突入している。そして、マウンド上の美周朗はムーランに対し、第二球を放った。

ツーシームジャイロ。

それは、スパイラル回転するムービングファストボール（ツーシーム）である。

変化は、全くしない。

80キロ台から、100キロ台の遅いボールが、浮きもせず、沈みも曲がりも落ちもせず、ひたすら真っ直ぐキャッチャーミットまで突き進むのだ。だからといって、置きに行っただけの棒球という訳でもない。しっかりと腕は振り抜かれているし、ボールも回転している。性質上、連投は出来ないが、小出しに投げればそれなりに有効なボールなのである。

ツーシームジャイロのスピードは、投げてみないと判らないところがあるのだが、今回は良い方向に働いてくれたようだ。とにかくおそい。どうやら80キロ台前半のようだ。

おそらく学人のストレートは【130キロ台後半】というデータがアメリカ代表には入っていることだろう。その投手が【80キロ台前半】のストレートを投げて来たのである。その緩急差は実に50キロに上る。そうやすやすとタイミングを取られるような代物ではないのだ。

美周朗の剣の舞は、戦神を味方につけるための儀式だったという。マウンド上の美周朗は、投球の舞で野球の神を味方につけたようだ。

野球の神を敵に回したムーランに、勝ち目などある筈もない。遅いストレートにタイミングを取り損ね、打席で見事に一周した後、

無様に尻餅をついてしまった。空振りのストライクである。

知昭の奇策と、学人の能力。その二つの相乗効果でクラシック記念スタジアムは、球場全体が日本代表のオーディエンスとなりつつあった。

6回裏

ツアアウトランナー無し

5対3

ボールカウント

ツナツシング

ゲームセットまで、あと9人と一球……。

三球目 ムーラン包囲網（後書き）

次回予告！！

玉木でございます

m (| |) m

ムーラン相手にちょっと変わった守備シフトを採りましたが、絶対に打ち取れる自信があります、自信があるんです

(| |) ニヤリ

さて今回は、その自信の種明かしと我が軍の攻撃の模様をお伝え致します（＾Ｏ＾）

次回 スイッチ！

四球目 剣持和俊意地の一撃

剣持先輩、我が軍の勝利は貴方のバットにかかっているのです。頼みましたよ。

「俺はメジャーに学籍して研究され尽してるから期待はするなよ」
ですって？

信賞必罰！

凡退などしようものなら必ず償っていただきますよ（…皿、）

以上、玉木でございましたm（――）m

四球目 剣持和俊、意地の一発（前書き）

申し訳ありません、プライベートが慌ただしく、気付いたらレッドゾーンに入ってしまったm（――）m

いや、ほんとに次回から気を付けますm（――）m

今回登場のウォン―壘手の名前は秘密基地【執筆トラブル救済】より、REO様からご提供いただきました（^O^）

この場を借りて、お礼申し上げます、ありがとうございましたm（――）m

四球目 剣持和俊、意地の一発

時空を超える足の持ち主であるムーランを二球で追い込んだ後、知昭は右翼手と中堅手を指差し、黒金と剣持を定位置に戻した。そして更に、時間一塁手と爪路二塁手も定位置に戻す。ツーストライクからバントを失敗すると、ファールでもストライクを取られ、三振としてアウトとなってしまうのだ。

セーフティーバントの極意はなるだけ一塁から遠い位置に転がし、一塁にボールが届く時間をコンマ一秒でも遅らせることにある。ツーストライクを取ったならば、三塁線（ホームベースからレフトポールへ突き抜けるライン）さえ固めておけばもう、バント対策としては充分なのである。

ホームベース近辺では相変わらず知昭がムーランに対し、何やら囁きかけていた。苦虫を百匹も千匹も一気に噛み潰したようなムーランの顔を見ると、いかにろくでもないことを囁いているのかが手に取るように解る。

それに合わせてゆったりゆったりゆっくりゆっくりなモーションで三球目を投げに入る。要求されたボールは内側の高めに外したストリート。

ムーランは、余程打ち気にはやっていたのだろうか、素人目に見てもはつきり解るボール球をスイングし、ファールとなった。

次に出てきたサインに学人は目を疑った。カウントはツーナッシング。バントでファールになれば、スリーバント（ツーストライクからのバント）失敗で三振アウトとなるのだ。にも関わらず、外高めにカットボールを投げた後直ぐにバント処理に走れというのである。

この状況においてこの指示は、海鮮丼に松茸が混じっているのと同じくらい、否、肝試しで侵入した廃屋から出てきたお化けと談笑

しながら焼き肉を囲んでいるのと同じレベルの場違い極まるものなのだ。

それはピッチャーにとつて、一番良くない状況であることは解つてはいたが、半信半疑で四球目を投げる。そして、知昭の指示通り、一塁線（ホームベースからライトポールへ突き抜けるライン）へと駆け降りた。

三塁線は村越左翼手を内野に入れて、ガッツリと固めてある。一塁線には投げて直ぐに学人が猛ダツシュをかけている。しかも、カウントがツーナッシング。どう考えてもバントなど有り得る状況ではない。

有り得る訳が無いのだ。

にも関わらず、ムーランが取った打法は……、バントだった。

ムーランが寝かせたバットに当たった学人のカットボール（バッターの直ぐ側でちよつとだけスライドする球）は、駆け降りてきた学人の目の前に転がってきた。それを拾って一塁に送球。際どいタイミングではあったがなんとかアウトに打ち取った。

ベンチへの帰り際、学人は知昭に尋ねてみた。

「なんでムーランがバントしてくるって解つたんだ？」と。

「まず、九人内野にして『どうだこら、これでバカの二つ覚えのバントはできねーだろ』と言ってやりました」

あの時知昭はこんなことを囁いていたのか。この言葉にカツと来たところにシンカーが来たら、待ちきれずに当て損ねるのも無理はない。

「次に、『情無いねえ、前に飛ばす事も出来んとは。バッティングはとんだザルなんだな、あんなにだだっ広く外野が空いてるのに、

非力な日本人のボールを捉える事も出来んとはな』と、意地でも振らせるように仕向けました」

学人はこの男の敵に回ったことが一度も無いことを、つくづく幸運だと思った。

「実際は三球目で仕留めるつもりだったんですが、当てられてしまいましたんで、バントせざるを得ない状況を作りました。剣持さんと黒金くんを下げ、ただタイミングが合わなかっただけの初球のスイングを力負けしたと勘違いさせるために『あーあ、日本人のシンカーに力負けしたあんたじゃ、絶対に越せない位置に外野手が戻っちゃったねえ』と言っておきました。うまいこと勘違いしてくれた彼は、予想通り手薄になった一塁線に転がすしか手がなくなったという訳です」

この人を小馬鹿にした強かな計略。まさに【グラウンド上の所葛孔明】の面目躍如といったところか。絶対に敵に回してはならない、学人は心に誓った。

『バッティングファースト

センターフィールドター

キャストウスイー ケモアーツィ』

七回の表、このインニングの先頭打者は四番の剣持からだ。どうもアメリカ人にとって、この『けんもち かずとし』という音は非常に発音しにくいらしく、なにやら訳の解らない暗号の様な言葉になっってしまった。スタジアムの声は、もの見事に二つに分かれている。大地を揺るがす歓声と、大地震のようなブーイングだ。まさにお国柄とでもいうのであろうか、いつもなら大歓声で迎える

筈の和俊の所属球団であるパイレーツファン達も、この日はかりは一心不乱にブーイング大地震に加わっていた。

なるだけランナーが居る状況で回ってきてほしい打者なのだが、単独で出てきても得点を当てにできる男である。

スコアは5対3。まだまだセーフティリードとは言えない。いくら野球の神が学人に降りたとはいえ、なにぶん気まぐれな神様のことである。いつアメリカ代表に乗り換えても不思議ではないのだ。今日のシユバルツ大トリデュオの出来を持つてすれば、3点差あれば少なからず勝ちを意識することができるようになる。

それだけに、この打席は重要な意味を持っているのだということに和俊は気付いていた。

だからといって、肩肘を張っている訳でもなく非常に心地好い緊張感を左打席から漂わせている。

相手投手に対して正面向きに左打席に入り、左右の足を打席の両隅に展げる。そして、バットをクルクルと回しながらその場で左にターン。これが和俊独特のオープンスタンス、通称【プリンスパル打法】である。

その名の由来は踊るような動きでスタンスをとり、投げ込まれたボールに対しかなり攻撃的な狙い撃ちを見せるそのバッティングによるものだ。

プリンスパル打法はオープンスタンス（前足を外側に引いて上半身を少し正面に向ける構え方）であるため、度々外側の球に振り遅れることがある。

和俊にそういうデメリット個性があるということを知っているアメリカ代表バッテリーの筈なのだが、これまでの二打席は、どちらもヒットで出塁している。

なぜ弱点を知られているのに打っているのか。それは、弱点を突

かれる前にとつと打ってしまったからだ。

高校一年半まで投手だった和俊は考える。俺ならここをどう攻めるかと。

導き出した結論は、こうだった。

【内側の球は全部外して、外側だけで勝負】

この打席における和俊の待ち方は、【外側一本に絞る】という方向に決定された。

シュタイナーとアンダーソンのバッテリーがまず始めに行ったことは、守備シフトの移動だった。全体的に左側に寄せ、一塁線にはもはやウォン一塁手以外誰も居ない。かなり極端な左寄りシフトを敷いて来たものである。このバッテリーには、それほど和俊に振り遅れさせる自信があるというのだろう。

和俊は燃えた。それはもう、酸素の中でマグネシウムを燃やす実験のように烈しく燃えた。

《俺様を誰だと思つてやがる！

史上五人目の三冠王、剣持和俊様だぞ！》

狙いは一塁線。外野にさえ抜けていけば、和俊の足ならランニングホームランにすることができる。6回裏のムーランと同じような状況を迎えていた。否、和俊の本来のウリはパワーであるため、ムーランのときよりやや得点できるチャンスは高いと言える。

シュタイナーがモーションを起こす。ごくごく一般的なオーバースローであるが、途中に独特な動作が混じるため中々にタイミングが取りづらい。そのうえで、150キロ前半のストレートを持っているものだから、和俊の苦手な投手第三位にランクインしているのだ。

第一球が投げられる。マウンドとホームベースの中間辺りにボールが到達した時点で、内側の低めギリギリに入る縦スライダーであることを、和俊は察知した。

《入ってる？》

内側なのに入れてきたのか？》

最初の読みは、どうやら外れてしまったらしい。オープンスタンスの特権は、若干振り遅れ気味でも内側のボールにある程度対応できることである……が、さすがに今回は、察知するのが遅かった。ストレートのタイミングで待っていたため、スイングのタイミングを修正するのが難しいのだ。

止むを得ず、見送ることにした。

「ツトライヤー！」

予想通り内各低めに決まった縦スライダーに、アンパイアのコールが響き渡る。

二球目、初球を入れてきた場合自分ならどうするか。

外に速い球を外して、誘う。

外各の高めに速い球を入れて、詰まらせる。

内側に遅い球を外して、内側を意識させる。

三つに絞れそうだ。シュタイナーはもう、腰を回して上半身を正面に向け始めている。

考える余裕を与えてくれないテンポの早さも、シュタイナーが苦手な理由の一つだった。

二球目。このボールは、だいたいが打ち取るために使われるボールのための伏線として使われる。ここで何を投げたかによって、今後の組み立てが大きく変わって来るのだ。今後の展開を読みきるため、敢えてこれも見逃すことにした。

シュタイナーの右肩が回り始める。そして放たれたボールは、ゆったりとした弧を描き、内各の高めに外れた。

《パターン3！》

ここから先は読み易い。外内外外。後は、最後の外に行くまで入れるか外すかの読みと、タイミングの読みだけだ。

三球目。このボールは、ホームベース裏に陣取る者、打席に佇む者、聖なる丘に君臨する者、三名の性格や身体能力によってどう使われるかが大きく違ってくる。この打席の場合、アメリカバッテリ―はテンポが早く勝負もわりと早めに仕掛けてくる。和俊はじつくり待つタイプであるが、そのペースに乗せないためにも確実にカウントを取りに来る筈だ。だとすれば、わりかし安全であると言える、外の低めが一番有り得るボールだろう。

コースと出し入れは絞った。あとは球種だ。いったい何を投げる気なのか。

打席に立つ者にとって一番難しいのが、球種の絞り込みである。

【来た球を打てばいい】このスタンスが通用するのは、高校までであり、プロの世界でそんな適当なやり方は通用しないのだということとを和俊は嫌と言っほと思いい知っていた。

今のところ、遅い球が二球続いている。遅い球に目が慣れてきた打者に対し、更に遅い球を続けることにメリツトはあまり無い。

和俊カンピューターが弾き出した分析結果は「外各低め、ストレ―ト」だった。

マウンド上では、返球を受けたシュタイナーがカクテルライトを一身に浴びながら、既に肩を回し始めている。瞬く間に振り下ろされてきた右肩から下の先端から、白い物体が……、弧を描きながらゆつたりと和俊の直ぐ膝元へと沈んできた。内各低めへのカーブである。

「ットライクツー！」

アンパイアが無情なる雄叫びを右手と共にあげる。

もの一分半で追い込まれてしまった。長い野球経験の中で、ここまで読みが外れたことはない。

《なんだ、何がしたい？》

《こいつらは俺をどうする気なんだ？》

これからは、怪しげなボールには全て手を出さなければならぬ。狙いは外、それは不変である。和俊を打ち取るには外の球が一番有効なのだ。

シユタイナーが、退け反るようにふりかぶってからアンダースローのように上半身を沈めて、そこからまた引き起こすという独特のモーションから肩を回し始める。

白地に黒いピンストライプ、黒いアンダーシャツというわりとオールドクスのユニホームに包まれた右腕が振り下ろされ、そこから投げられた白球は、小気味の良い音を発して空気を切り裂き、外各高めへとすつ飛んで来た。

和俊は、外側一本に的を絞っていた。そして、ストレートを待つてもいたのだ。

にも関わらず、前の三球の遅さがブレーキとなり振り始めるタイミングが明らかに遅れてしまった。

その結果、辛うじて当てた打球は低い弾道のライナーとなり、真横へ飛んでフェンスに直撃、ファールとなる。

なかなか明らかなボール球が来ない。そして、甘い球はもつと来ない。そんな中、なんとか粘ってフルカウントに持ち込んでいた。

《これで今度はこいつらが外せなくなったぞ》

今までは悉く読みが外れてしまっていたが、さすがにここで外れることはないだろう。【外各低め、ストレート】

ボール球をきっちり見送り、際どい球も悉く当ててくる和俊にアメリカバッテリーは根負けしてしまったのだろうか。ずっと厳しいコースを突き続けていたシユタイナーが、遂に投げてしまった甘い球は外各のやや高めへと入って来た。

今度のボールは振り始めるタイミングもきっちりと合い、真芯で捉えることに成功する。そして、自慢のパワーを遺憾無く伝え切り、

レフトスタンドの日本応援団にホームランボールとしてプレゼント
することとなる。

ベースを回りながら和俊は、どんな人がサインを入れてもらいに
来るのか楽しみにしていた。

スコア

七回表

6対3

四球目 剣持和俊、意地の一発（後書き）

次回予告！

剣持です（＾Ｏ＾）／

いや、いつになく知昭のえげつなさが光ってるねえ（＾―＾；）

この分なら、この三点で充分かな（＾Ｏ＾）

責任を果たせて一安心だね、知昭に罰ゲーム押し付けられずに済み
そうだし（＾―＾；）

さて今回は、なんと学人が六年振りに打席に！

次回 スイッチ!

五球目 ミサイルでは潜水艦は落とせない

ツイてる時は何やってもうまく行くんだよね (^o^)

ただ、その分デカイ落とし穴ってのがあることもあるんだけど (^
| ^:;))

以上、剣持でした (^o^)/

五球目 ミサイルでは、潜水艦は落とせない(前書き)

まだバタバタしてます(TOT)

ほんとすいません

m (((m

もう少しで落ち着きそうです。休筆せずに済みそうですが、あと一回ぐらいレッドに入るかもしれません(TOT)

今回登場のポール・ヒューイット投手の名前も、前回に引き続きR
EO氏から提供していただきました(^O^)

ありがとうございましたm (((m

五球目 ミサイルでは、潜水艦は落とせない

果たして誰がこの様な展開を予想しただろうか。いや、間違い無く誰も予想していなかっただろう。

6 回終わって6対3、しかも、日本はツーアウトながら二塁と三塁にランナーを置いているのである。そこで、

『バッティンググナイン

ピッチャー

ギャクトオ オーノオ』

という状況となった。

パ・リーグは指名打者制（ピッチャーの代わりに守備に就かない打撃専門の野手が打席に入って良いという制度）であるため、シユバルツのクローザー一筋6年目の学人は、向こう六年間、まともにバットを振った試しがない。それ以前の野球人生を遡っても、やはりクローザー一筋だったため、公式戦の打席に入ったことは片手で数えることが出来る程度しか無いのである。

そんな学人に、優勝候補の筆頭であるアメリカ代表にシングルヒットで4点差、長打で5点差、一発出れば6点差をつけることが出来る大チャンスで打席が回ってきてしまった。

それにしても野球の神とは、なんと皮肉なものなのだろう。いくらノッているとはいえこの状況で学人に回すとは……。美周朗は剣の舞い、マウンド上の美周朗は投球の舞い。それが本来の彼の舞いのフィールドである。いつもとは違う畑でボールからバットに持ち変えたマウンド上の美周朗は、果たしてどのような舞いを見せてくれるのだろうか。

三塁側の内野スタンドからは、日本の大応援団からの大声援の中に有っても一際目立つ大きな声で、

「パパ頑張れー！！！」

「パパ打ってー！！！」

という、歳端もいかない子供特有のけれん味の無い澄んだ裏声が聞こえてくる。ここは娘達のために、久々に本気でバットを振ってみよう。学人はそう、心に決めた。

都合十年ぶりぐらいに、バットを携え打席に向かう。圧倒的戦力差を持つ敵軍に相對して、一步も怯まず渡り合っている。日本代表の長老、剣持和俊がトドメとも言える一撃を放ち、今学人に回ってきている使命は、云わば敗残兵総討指令である。

そういえば、三国志で一番周瑜が活躍していた赤壁の戦いも、呉軍の長老、黄蓋による見事な突撃によって魏の大軍にトドメをさしていた。

……だが、この時周瑜によって行われた敗残兵総討作戦は、失敗に終わっている。しかもこの時に受けた矢傷が感染症を引き起こし、弱冠三十六歳で彼は病死してしまうのである。

《ちよつと、ヤベえかな……》

別に自分がマウンド上の美周朗という通り名を賜っているからといって、彼と同じ運命を辿るとは思っていない。だが、この周瑜の作戦失敗は大勝ちに油断したことによる、注意力の低下が元凶であると読んでいた学人は、このエピソードを思い出し大打者と対戦するときの何倍もの注意力をもって、打席に向かった。

アメリカ代表は、さすがに6点も奪われた投手をいつまでもマウンドに上げておく訳にもいかず、剣持、黒鉄、村越に連打を浴びた時点で二番手のポール・ヒューイットにスイッチしている。ヒューイットは、学人が打席に入るなりもうモーションを起こしてきた。

そして、この時ようやく学人は悟ったのである。ツイている時は何をやってもツイているのだということ。

ヒューイット。

この投手はメジャーの中でも一二を争うモーションが小さい（投球動作がコンパクトで、とても素早い）投手であるとの噂を和俊か

ら聞いていたのだ。そのヒューイットのモーションが、とても遅いのだ。いや、むしろ止まっていると言った方が正しいのかもしれない。連続写真のようなストップモーションとなって目に飛込んでくる。

学人自身、有ることは知っていたが実際に体験するのはこれが初めてだ。トップアスリートが極限までその精神力を高め、その上で集中力も極限まで高まった時に突入するというストップモーションの聖域。

学人自身半信半疑だった超一流への登竜門。

いわゆる、【ゾーン】である。

ゾーンへの入り方は十人十色だと言われているが、一旦入ることができれば、いつでも入ることが出来るという点は、全員に共通している。学人は、その点もはつきり把握していた。彼の場合は、絶好調の時に、赤壁の戦いの事後処理時の周瑜を思い出せばいいのだ。これは後の野球人生を考えると、かなり大きな収穫と言える。未だ二十四歳。まだまだこれからなのである。

まだヒューイットの右肩は回っていない。まさにスローモーションである。このぶんなら、たとえ投手である自分であっても総討作戦を果たすことは出来そうだ。心地好い緊張感を保ちながら、じつくりとヒューイットの動きを観察する。

バッティングのタイミングの取り方の基本は球離れの瞬間を見極めることが出来るかどうかに尽きる。普段なら見ずらい筈の右投手の腕の動きが、信じ難いほどはつきりと見えている。今ボールがどの位置に有るのか手に取るように確認することが出来た。あまつさえ、どう握っているのかさえはつきりと判る。

ストレートかカーブかスライダーかシュート。握りから察して、投げる球はこの四種類に絞れそうだ。

右肩が回る。腕の回転は、左回転。この時点でシュートは消える。後はリリース（ボールから手を離すタイミング）の問題だ。それさえ判れば、かなり早い段階でなにが来るのか察知することが出来る。指がボールの真上に来たところで切って投げてきた。最近ジャイロボールという呼び名で認知されてきた、浮く変化球だ。

ボールの軌道を見極めるため、取り敢えずこれは見逃してみることとする。あまり日本では投げる投手が居ない変化球だ。下手に手を出して打ち上げてしまつては、球自体はよく見えているだけに、どうにもこうにも後味が悪い。

投げられた初球は、予想通りに真つ直ぐから大きく浮き上がってきた。もはや、キレの良いストレートは浮き上がって見えるなどというレベルではなく、確実に浮いている。そして、それがジャイロボールなのだ。

通常のバックスピンストレートならば160キロ以上の速度で200回以上回さなくては浮かないが、スパイラルスピンのよつてジェット推進力と浮力を同時に獲得することで125キロ以上、100回転で浮き上がることが可能となつた特殊なストレート、それがジャイロボールなのである。

《ビンボールか……》

いつもの学人なら怖じ気付くのかもしいない。それどころか、避け損ねる可能性すら多分に有り得る。だが、今日の学人は、いつもとはひと味違ふのだ。自然な流れで避けの体勢をつくることが出来た。

打撃の神様川上哲治氏の言葉として有名な【ボールが止まって見える】というのは、まさにこれのことなのだろう。頭に向かってすつ飛んで来る危険球に対して、なんの恐怖も感じることはない。

それにしたつて、9番ピッチャーに対して初球からビンボール……。この組み立ては、アンダーソンの個人的な復讐によるものか、絶好調の学人をチームぐるみで潰しにかかっているのか、どちらかしか考えられない状況だ。バックスクリーンに155km/hと表

示されたジャイロボールを余裕でかわしながら、学人は、燃えた。

ボールは見えている。間違い無く見えている。今のビーンボールによって、その感覚は確信へと変わった。後は芯で捉えるだけだ。せつかくボールが止まって見えるのだから、変に配給を読みにかかるとより来た球を打つスタンスの方がいい。これは、ゾーンに入ることに成功した選手の特権と言える。

二球目。ヒューイットの右手は縫い目とクロスするように浅く握り込まれている。カーブ、シュート、スライダー、ジャイロボール。握りが見えるというのは本当に楽だ。腕は右側に回っている。シュート確定。まさかぶつけるためにわざわざシュートさせる必要も無いだろう。残る作業は、ボールをしっかりと見て真芯で捉えることだけだった。

ヒューイットの投げたシュートは学人のストライクゾーン手前に到達したとき、外高めのスレスレのところまで止まっていた。

「川上さん、マジでボールが止まってますよお！」

打撃の神様に呼び掛けながらスイングを開始する。

リトルリーグ、シニアリーグ、旭川実践学園高校、そして沖縄シユバルツとクローザー一筋13年。高校時代ティーバツティング（ゴルフのファーストショットのように予めティーアップされているボールを打つ、芯で捉えるための練習）でボテボテのファールチップを打ったという不名誉極まる伝説を残しましたが、打ち損じても学人はピッチャーだ。誰もその事を責めやしない。

打てなくて当たり前の存在。攻撃においてこれほどに陰の薄い存在であるということが学人の気持を更にリラックスさせている。そして、なんのプレッシャーも無くスイングされたその一振りには、ヒューイットのシュートを真芯で捉えることに成功していた。

「飛んでけオラア！」

気合いを込めて弾き返されたそのボールは、中堅手がちんたら歩いて追うほど大きな当たりとなって、バックスクリーンに到達した。

スリーランホームラン。

初球のビーンボールで若干熱くなっていた学人は、ホームを踏んだ刹那、アンダーソンに対し、

「潜水艦はミサイルじゃ落とせねえんだよ！」

との言葉を拙い英語で言い放つ。当然マナーを注意されもしたが、そんなことはもはや、どうだっていいことだった。

スコア

7回表

ツーアウトランナー無し

9対3

五球目 ミサイルでは、潜水艦は落とせない(後書き)

次回予告!

こんばんは、深幸だよ(^ ^)

パパスゴイ!

ホームラン打っちゃった(o)

調子に乗って変な球投げちゃ駄目だよ(^ | ^ ;)

次回 スイッチ!

六球目 機雷は意外な場所から放たれる

パパ調子くれすぎだから、ほんと心配なんだよお(TOT)

以上、深幸でした(^ o ^) /

六球目 機雷は意外な場所から放たれる

ワールドベースボールクラシック決勝戦は、6回を終了して9対3と、日本がアメリカを6点リードしている。残るは7回、8回、9回の3イニングス。これを学人が5失点以内に押さえることが出来れば日本代表の世界一が確定するのである。

今日の学人は、いつもの学人ではない。1イニングを10球で終わらす体のキレと、6年数ヶ月ぶりの打席でホームランを放つ運の良さや勢いを持っている。

だからこそ、彼は監督に告げてしまったのだろう。

「監督、今日のゲーム、もう誰もピッチャー作んなくていいっすよ」と。そして、それを認識していたからこそ、監督もこの要請を受け入れたのだろう。確かに、これだけあからさまに絶好調なクロージャーを、いつもよりイニングが長いからなどという理由で引込めるなどということは、ある意味ではあつてはならない事である。だからこそ、監督もこの7回裏に学人をまたマウンドに送ったのだ、否、送ってしまったのだ。勿論彼の要請通り、他のクローザー達をベンチに置いたままで。

この回の先頭、ジェイソン・クロードを6球でショートゴロに仕留め、ランナーの居ない状態でクリーンナップへと差し掛かる。

3番はサードのジョージ・アレックス。身長209cm、体重103kgの超ヘビー級選手だ。

7試合でホームラン10本という破壊力抜群の超弩級クリーンナップを迎えるに当たって、知昭がまたタイムを要求してマウンドに駆け寄ってくる。

「ランナーが居ないことですし、満塁策という手もあるんですが……」

クリーンナップは全て歩かせ、6、7、8、9番のうちどこかで2つアウトにしようという作戦だ。3、4点は献上する覚悟をし

なくてはならない。

「ランクとしては、最下策だよな？ もっといい手もあるんだろ、孔明さんよ」

馬鹿げている。せっかく調子がいいのだから、ここも勝負に行つて、ねじ伏せるべきなのだ。

学人も、妻子3人という扶養家族を持つ身なのである。いつまでも、年棒700万程度の低賃金ではやっていられない。漸くシユバルツの守護神というポジションを確立した今年は、おそらくは1000万は上がってくれるだろうが、それ以上を望むのならば、このゲームで結果を出すしか道はないのである。

そしてなにより、今日の学人には、このクリーンナップを片っ端から薙ぎ倒す自信があったのだ。

「満塁策は却下だな。確実に一人ずつ打ち取りたい。気持は解るけど、俺にも家庭の事情つてのが有る訳よ」

知昭の事だから、無策でただ歩かそうとしている訳ではないのだろうが、やはりここまで来たら、ここから先もパーフェクトに抑え、年末の契約更改で複数年で1億1000万円ぐらいは有り得るレベルにしておきたいのである。

備えあれば憂い無し。将来娘達がどんな道に進みたいと言い出しても、確実に対応できる程度の経済力を持つには、このレベルの年棒が必須となるのだ。

だから、パーフェクトリリース。人の子の親としてここを譲るところは出来ない。

「取り敢えず、戦う方向で組み立ててくれるか。作家になりたいだの、芸能人になりたいだの言われたら、どうしても金が追いつかないからさ」

子供の夢を限界までサポートすること、それが親としての務めであるというのが、学人の親としての信念なのだ。

知昭は、なにか困った顔をしながらしきりに小声で呟いている。彼はいつもこうだった。何か困ったことが起こると、口に出しながら

ら、それに対する対策を練る。

知昭は余程困っているのだろうか。いまだに鈴虫の様な綺麗な声でブツブツ言いながら、軽く右手を挙げてマウンドから去っていく。その姿はとても寂しげで、どこか遠く離れた場所へと居なくなってしまうかのような連想を抱かせる程だった。

ホームベース裏の定位置に戻った知昭が、またもや懲りずに敬遠（わざと四球を出して、一塁に行かせる作戦）のブロックサインを出してくる。勿論首を横に振って、即刻跳ね退けた。何が彼をこれ程までに警戒させているのだろうか。普段の彼なら、追い返されたら直ぐに勝負の組み立てを指示して来るのだが……。

2回目のサインで、漸くウエストボール以外の指示が出る。外高めギリギリに外すフォーシームジャイロ。ストライクゾーンから、浮き上がって外れていく軌道のボールだ。打ち気に逸って手を出してくれば、1+1¹2と同じレベルで確実にフライを打ち上げてもらえるオイシイボールだった。

初球、ゆったりゆったりゆっくりゆっくりとした投球の舞いから、140キロのフォーシームジャイロが放たれる。このスピードは学人にとって、今迄投げたことの無い未知のスピードだった。勿論、アメリカ代表にとっても未知のデータである。アレックスも驚きを通り越した、仰天した表情を浮かべている。

最速138キロ、このスピードを6年間更新できていなかったのだから、この速さが小野学人の身体能力における限界速度なのだとアメリカ代表は捉えていたのだろうか。

突然の学人の最速更新にアレックスは、ピクリと両手を反応させていながらも、結局バットを振ることは出来なかった。

「どうしたんだよ、打ちたかつたんだろ。そんなザマじゃもう、戦力にもならねえから、引退してプロレスラーにでもなっちまいな！」
これはチャンスだと踏んだ学人は、口撃による精神攪乱に出た。

精神を掻き回された強打者は、忽ち只振り回すだけの壊れたサーチ

ライトのようになってしまふのだ。

初球は狙い通り、高めに外れてボールの判定を得ている。続く2球目。このボールは出来る事なら外したくはない。カウントが不利になればそれだけ戦略が限られてしまふ。

相手の思考力にダメージを与える情報の種類は多いに越した事はない。そして、その情報を使いこなすだけの技量が、この日本代表バッテリーには間違い無く備わっているのだ。使える情報の数を自分達の手で減らす道理は無い。

だが……、

知昭からの要求は、内側低めに外し落とすフォークボールだった。
《なんだこいつ、まだ逃げる気でいんのか！》

勝負するなら、ここはストライクだ。普通は入れなければならぬところである。このタイミングでの外し、際どいところを突いて凡打を誘いつつ、歩かせても良いと考えている可能性を否定は出来なかつた。

学人の精神もまた、知昭のリードによって掻き回され始めている。

六球目 機雷は意外な場所から放たれる（後書き）

次回予告！

玉木でございます

m (| |) m

人間、欲をかくとろくな事にはなりません。今の学人くんは、間違
い無く金銭欲に走っています。突っ走っているんです（TOT）
こうなってしまった人は、古今東西問わずだいたい自滅しているん
です。なんとしても、今の彼は戒めなければなりません（ | | - # ）

次回 スイッチ！

七球目 沈没……、不沈潜水艦 小野学人号

つたく、だから言わんこつちや無い……（TOT）

死なずに済んだだけマシだと思っってくださいよ（ | | - # ）

以上、玉木でございますm (| |) m

七球目 沈没……、不沈潜水艦小野学人号（前書き）

遅れてすみません

m (| |) m

只今かなり深刻なスランプ中であります（TOT）

全く納得のいく文章が書けず、何やら状況の説明に終始している感じになってしまいました……（TOT）

いつもそのきらいはあるのですが、今回は特に酷くなってしまってますm (| |) m

打開案が何か有りましたらアドバイスお願いしますm (| |) m

七球目 沈没……、不沈潜水艦小野学人号

ワールドベースボールクラシック決勝戦。6回表3/1を終了して、9対3と日本代表がアメリカ代表を6点リードしている。マウンドにいるクローザー小野学人があからさまに絶好調であることもあって、スタジアムを日本の優勝だなという空気が支配しはじめていた。

だが、ここにきて日本代表は、思いもよらない形の不協和音を響かせ始める。

迎えているバッターはアメリカ代表3番のクロード。予選を含む、5戦で8本のホームランを放っている長距離打者だ。自分の、そして、家族のために、どうしてもここは勝負して抜伏せたいのだが、キャッチャー玉木知昭はそうは思っていないらしい。

敬遠による満塁策を提案しにマウンドまで来て冗談じゃねえと追い返された後の初球にボール球。そして、2球目にもまた、ボール球を要求して来たのだ。

《こいつまだ逃げる気なのか!?!》

段々そんな気分になってくる、手を出してくれたら儲け物的な雰囲気はどうしても否定できない配球だ。

ホームプレートの上に置いてあるボールにも、バックネットにめり込んでいるボールにも、1球で当てることの出来るコントロールを持っていてる学人を信頼しての配球なのかもしれない。取り敢えずそう信じて、学人は要求通りの外側に外し落とすフォークボールを

投げ込むことにする。

2球目に投じられたそのフォークボールは、非常に際どい位置に落ちてきた。打撃の神様と呼ばれているような連中でも判断に迷いそうなほど、際どい。

高さのカウント判断は、ストライクゾーンからボールの一部でもはみ出した時点で【ボール】となる。幅のカウント判断はボール1つ完全にはみ出ではじめて【ボール】なだけに統一してもらいたい気もするが、目の悪い審判なら【ストライク】とコールしてもらえない可能性が極めて高いボール球、そんな、絶妙なコースに投げ込むことに成功したのだ。

今日の球審は抗議を受ける度に、
「私の目がストライクゾーンだ！」

と当たり前言い切ってしまったほどの素晴らしい目を持っているため、ストライクのコールは頭から期待してはいないが、ここで問題なのは球審の目ではなく、クロードの目なのである。

どんなにストライクに近いボール球であったとしても、初めからボール球を叩くつもりでスイングしなければ、必ずポテポテの内野ゴロとなる。野球のストライクゾーンという空間は、それほどまでに緻密に計算され尽くしているのだ。

クロードは、日本でプレーしていたならば間違いない【ブンブン丸】と称されているだろう、とにかく振り回すタイプの強打者だ。勿論ボールを選ぶ目も、頗る悪い。この男がこのボールに対してスイングの姿勢を採る、もしそうなれば、その瞬間に9割方日本代表にとって都合の良いカウントが一つ増えるだろうことが予測できるのだ。

このゲームに於ける学人は、間違いなく絶好調だ。そしてやはり、野球の神をも味方に付けている。

神は、マウンド上の美周朗の華麗なる投球の舞に、クロードにスイングさせるといふ褒美を取らせたのだ。ボールの上っ面にバット

を当ててしまったクロードの打球は、セーフティーバントのように、一塁線際にコロコロと転がる当たりとなつてフェアグラウンドを進んでいる。放っておけばそのうちきれる打球なことは確かかなようだが、学人はそれを黙って放置しようとは思わなかつたようだ。

即座にマウンドから駆け降り、ボールを素手で掴むとそのまま一塁へ送球。かなりの余裕を以つてアウトとすることができたのだ。

これで2アウト。ここで4番を打ち取り、次のイニングの頭に5番を打ち取れば、1人ランナーを出してしまったとしてもまだクリーナツプに回つて来ない。学人が目標としているパーフェクトリリーフがジワリジワリと現実味を帯びてきた瞬間だつた。

『バッティングフォース ファーストベースマン ウォン・スミス・リー！』

流暢なスタジアムDJによる英語のアナウンスに導かれ、4番打者リーが左打席へとやってきた。世にも珍しい、スイッチの4番打者である。

この男、もとは李元という中国人だつた。

それが、メジャーリーグで頭角を表し、次々とシーズン記録を塗り替えて行くにつれ、常々ワールドベースボールクラシックの優勝候補筆頭に挙げられながら準優勝、或はベスト4に甘んじ続けているアメリカ（厳密にはMLB）からの強い要請を受け、名前を漢字からアルファベットへ直し、スミスというミドルネームを挿込むこ

とよってアメリカに帰化したのである。

日本という、サッカーの三都主や呂比須のような、リーサルウェポンの存在だ。

元シユバルツの選手であり、現在はメジャーへ移籍してウォンと同じチームでプレイしている剣持和俊外野手からも、

「こいつとだけは、勝負せんほうがいい」

とのアドバイスを受けている。だが、そうはいかない。こういう打者を打ち取ってこそその複数年契約1億1000万円なのである。折角のチャンスなのだ。逃したくない。

すかさず知昭に勝負するぞとのブロックサインを学人が発信する。それに対し知昭は、未だかつて見せたことの無いような厳しい顔付きで、外へのウエストボールという要求を返してきた。

致命的な意見の食い違い、不協和音。

バッテリー間での不協和音は、あらゆる形でチーム全体に悪影響を及ぼす。

ウエストボールに対して頭を激しく横に振る学人。それに業を煮やし、あからさまに立ち上がって右側に移動する知昭。もはや、ウォンへの初球に対する意見の確執は、收拾のつかないレベルにまで発展していた。

スタジアム全体が、一種異様な雰囲気にも包まれ始めた。ここにきて突然に勃発したバッテリーの仲間割れを、その場にいた全員が察知したのである。アメリカベンチが慌ただしく動きだした。何やらウォンに対してせわしなくブロックサインが発信されている。

この非常事態を見かねた森沢三塁手が三塁塁審にタイムを要求、内野手全員がマウンドへと集合した。

「で？ おまえらは何がしたいんだ……？」

選手を代表して、キャプテンに任命されている爪蒔が怒りをあらわにした口調で詰問する。

「敬遠です」

「勝負つすよ！」

ほぼ同時に返ってきた返事も、やはり食い違っている。この非常事態に收拾を着けなければ、例え100点差あるのが勝ちきれない。勿論負けはしないのだろうが、気持ちが悪くないのである。

「玉木、なんで敬遠なんだ？」

「万が一にも、相手に流れを渡さないためです」

「小野は？」

「純粹に……、楽しみたいんすよ、マウンドを。そりゃ金のためつてのも多いに有ります。でも先輩も投手経験あるなら解るっしょ？ 凄え奴打席に迎えるこの醍醐味っつうかなんっつうか……」

確かに、知昭の考えも解らなくはない。

ホームランを打ってしかるべき者に、きっちりホームランを打たれる、それによって流れがガラツと変わるといのは、古今東西よく有る話だ。これは、チームの大黒柱であるキャッチャーというポジションである者ならば、誰もが胆に命じておかなければならない基本的な心構えでもあった。キャッチャーというのは、少し臆病なぐらいがちょうど良いポジションなのである。

だが、それでも、それが解っていてもなお、学人は譲れない、否、譲りたくなかった。世界レベルの強打者連中と当たって、勉強、吸収できる滅多にないチャンスなのである。在日時の和俊と別なチームだったならこれほど強打者に飢えることも無かったのだろうが、残念なことに和俊もまた、シユバルツ一筋16年という選手だったのだ。

【とにかく、勉強したい】

そこには、彼の純粹な向上心が存在している。勿論複数年契約1億1000万円という野望も有るのだが……。

ウォン・スミス・リー。今シーズンの成績が4割1厘、53本、280打点。まさに非の打ち所が無い、問答無用の大打者だ。

紛れも無く、今の日本には居ないタイプの打者である。

少し前までは和俊がこれに相当していたが、同じチームであったため紅白戦ぐらいでしか戦ったことがないのだった。打率4割。それは、ヒットを平均で4打席に一度打っているということを表す数字だ。運が良ければ、一度も打たれずに終わることも充分有り得る。そしてその運の良さを今日の学人は持っているだ。

四方八方からカクテルライトが降り注ぐクラシック記念スタジアムのマウンドに向かって放たれる怒涛のようなハリーアップコールとブーイングの中、爪落キャプテンは、一つの決断を下す。

「勝負だ」と。

知昭はまだ納得出来ないように、小さく頭を振りながら定位置へと帰還していく。もしここで流れをやってしまった場合、残り2イニング3分の1。このイニングで5失点という数字は充分に考えられることなのである。

今までの学人は、単純に運と調子が良いだけであり、決して、実力で抑え込んでいる訳ではない。学人自身もそのことには気付いている。だが、彼は、それだけの運があるならやってみるべきだと考えていたのだ。

チームの方針に従い、知昭が漸くウエストボール以外のサインを出してくる。内側低め、ムービングボール。いわゆるツーシームだ。注文通りボールを握る手を、腕ごと回しながら振り抜く。

気持ちが揺らいでいたせいか、狙いより若干外に行ってしまったが、それでも致命的な制球ミスという訳でもなく、ボール半分の外側へのズレは何の問題も無く見逃してもらったことに成功した。

ジャッジはストライク。2球目をストレートを外の高めに、3球目にシンカーを外の低めにそれぞれ外して今のカウントは1ストライク2ボールとなった。

3球目。ここで知昭から、【勝負だ】というサインがきた。どうやら、このボールで打ち取るつもりらしい。知昭からの要求は、内側高めギリギリに入るフォーシームジャイロ。内側の打ち頃な高めから、ギリギリの高めへと浮き上がらせるボールである。

外の釣り球を2球立て続けに微動だにせず見送ったのを見て内側待ちであると判断、内側の甘い球と見せ掛けた厳しい球なら打ち取れると踏んだのだろう。

無論、学人としても、全く異論は無い。

半身でふりかぶって4球目を投げる。予想通り振ってきた。だが、その軌道は、想定外の軌道だった。この打席初のウォンのスイングは、確実にボールを捉えることに成功できる軌道なのである。

《誘い出されたか！》

悔やんだ時は後の祭り。それに気付いた時には、既にバットとボールが内側高めギリギリのストライクゾーンで正面衝突していた。

反射的に知昭は立ち上がり、学人は振り返る。普通なら、スタンドへと一直線にすっ飛んで行くことだろう。だから、後ろに振り向いたのだ。

が……。

やはり今日の学人は、いつもとは何かが違うている。この当たりでも打球に角度が付かず、ライナーとなっていたのだ。

後ろを向いていて、打球を全く見ていない学人への。

真芯で捕まった打球が、まるで殺意を持っているかのような殺人的な猛スピードで学人の後頭部へと迫っている。

そしてそれは、薄いポリエチレン一枚という頼りない兜を纏っているだけに過ぎない無防備な後頭部を直撃、日本が誇る伝説の不沈潜水艦を地べたへと沈めてしまった。

七球目 沈没……、不沈潜水艦小野学人号（後書き）

すいません、「なんで……？」同様こちらも次回予告、終了にしよ
うと思います m（――） m

只今スランプに陥っており、かなり長く更新期間が開くと思われま
すが、これからも全身全霊を以って取り組んでいきますので宜しく
お願いします m（――） m

ではでは（^o^）ノ

八球目 小野家が迎える試練

後頭部にライナーの直撃を受けた学人は、マウンドの上に沈み込んで昏倒、担架で退場することとなった。チームドクターによつて応急処置が施され、早急に救急車が手配される。

慌ただしく身柄を動かされているにも拘わらず、当の学人には意識を取り戻す気配が全くない。そんな騒ぎの中、球団広報によつて呼び出された小野家の連中が医務室へと駆け込んできた。

「ガクトは、ガクトはどうなるんですか!？」

美里が入るなり大声を張り上げる。

「奥さんですか？ 御主人は、おそらく頭蓋内出血を引き起こしています」

「で!？」

「早く病院に運ばないと非常に危険なのですが……」

「ですが何!？」

この、都合の悪いことをお茶を濁すように告知しようとする医者独特の態度に業を煮やしたのか、美里がドクターに掴み掛かってしまった。

「病院が遠いんです。場合によっては下半身不随になりかねませんし、状況によつては最悪の事態も有り得ます」

胸元を美里に掴み上げられたままドクターは、いたって冷静に言葉を返す。美里はその場に力無く崩れ落ち、俯いて涙を零した。

座り込んだままの姿勢で学人顔を向け、静かに呟く。

「まさかあたしを置いてつたりしないよね？ ガクトも置いてかれる辛さを知ってるなら、間違つてもあたしを置いてつたりしないでよ……?」

学人は美里と知り合う前に交際していた女性を事故で亡くしていた。相手に対する想いが強ければ強いほど、その相手にしがみつき、

縛り付けられ、全く身動きが取れなくなってしまう。

交際当初の学人の堪らなく辛そうな様子を間近で見えてきた美里であるだけに、そして、学人の元恋人に対する想いに負けないぐらい学人を想っている美里であるだけに、どうしても失いたくなかった。そしてそれは、学人自身の死に打ち勝つ体力と、生きようとする気力にかかっているのだ。

十分後、漸く救急車が到着。まだ意識が回復しない学人とその家族達を乗せて救急病院へと向かった。病院に向かう道すがら、球場ではただならぬ気配を察してか、一言も発さなかった娘達が美里の両脇から袖口を掴んで引つ張りながら、

「かはんしんふずいってなあに!？」

「さいあくのじたいってなあに!？」

と、幼児独特の、中途半端に舌足らずで間延びした口調で一氣にまくし立てる。

「下半身不随っていうのはね、パパのお臍から下が死んじゃうこと。最悪の事態ってのはね、パパの体全部、つまりね、パパが死んじゃうってこと」

小虫の羽音のような頼りない声色が、元グラビアアイドルだった美里の調った唇から漏れる。

「パパ死んじゃうのー!? パパ動けなくなっちゃうのー!?」

これが双子のシンクロというものなのだろうか、二人の、よく聞かないと区別がつかない程全く一緒な声色が、物の見事にハモった。

「ねえママー、パパ死んじゃうのー!?」
まだ年端もいかない幼稚園児二人組が言うことである。何の遠慮も無いこの、ストレートな物言いも仕方ないといったところだろう。美里としても、いい知らせを聞かせて早く子供達を安心させてやりたいところだろうが、まだチームドクターの見立てだけでは何も言ってやることが出来ない。

「ねえ、パパどうなっちゃうのー!?」
なおも二人が美里の袖を引っ張っている。ビロビロに延び切った長袖が、美里の両手を不格好に覆っていた。

美里の沈黙に耐え兼ねたのか、ついに長女深幸が、
「わあー! パパが死んじゃうよー!!」
大声を張り上げ、泣き出してしまった。それに釣られて真幸も「やだあー!!」と泣き出す。幼稚園児二人組による、醜く騒がしい不揃いで不格好な大合唱が始まってしまった。

パシィ!

不穏当な音が、騒音を掻き鳴らして赤色灯を回しながら道路をひた走る、緊急車両の中に響き渡る。その音源は、真幸の頬だった。左の頬に真っ赤な手形を付けた真幸が、男の子然としたキツとした目つきを己を殴り付けた母親へと向け、無言の抵抗をしている。犯人である美里も、己の娘を殴るだけ殴ってそのまま黙り込んでしまった。

意味もなく緊張した時間が流れていく。真幸が黙ったのを契機に、深幸もまた黙っていたが、この二人が美里へと向けている目は、とても自分の母親に対して向けるような目つきではない。この二人、理不尽な攻撃に対してきつちりと敵意を向けることが出来る芯の強さを持っているようだ。

《この強さ、学人譲りだ》

不意に今日の前で、死神と格闘している最中であろう最愛の男性

の精悍な顔立ちが、意識の中にフィードバックされてきた。それを取っ掛かりに、二人の様々な思い出が次々と浮かんでくる。

《だめ！ 何ガクトの走馬灯なんか出してんのよ、あたしの頭！》
学人の死を認めてしまったかのような己の思考を、大きく左右に頭を振り乱して必死に打ち消そうと試みる。だが、ぐったりと微動だにしない学人の姿が、それを打ち消させてはくれなかった。

「ママのバカ！」

突然真幸から放たれた一言。それは、理不尽な一撃に対する遅巻きな反撃。その非難の言葉を美里は全面的に受け入れ、謝罪を始める。

「マユちゃん、ごめんね、ほんとにごめんね……」

そして打った理由の説明を始めた。

「あのね、人ってね、【死んじやう】って思われたら、ホントに死んじやうことがあるの。だからね、どんなに死んじやいそうになっても、【絶対死なない】ってお祈りしなきゃだめなの」

二人の子供達は、解ったような解らないような、微妙な顔をしている。

「だから、何があっても【死んじやう】なんて言ったらだめなの。ミユちゃんも解った？」

やつのことで病院に到着、学人の命は、救急救命士から脳外科医へと預け先を変えることとなる。

これから先は、X線撮影、CTスキャンといった検査を経て、おそらくは間を置かず手術の運びとなるだろう。検査などせずとも昏倒している時点で【異常有り】は確定しているのだが、なんであれ現状把握のための検査は必要となるのだ。

病院から、学人受け入れチームが慌ただしく飛び出してきた。そして、病院内へと搬入していく。

その猛ダッシュに学人の手を握る形で加わっていた美里は、
「絶対にこっちに還ってきなさいよ！ もし置いてったりしたら、あたしもすぐにそっち逝って、しこたまぶちのめしてやるんだから

ね！」

と、ややきつめの励ましの言葉をかける。そしてついに、学人の体が検査室へと消えていった。

九球目 診断結果

美里は只ひたすらに、待合用の簡素な椅子に腰掛けていた。その両脇には、真幸と深幸。袖が延びきってしまったことを気にしてか、今度は引つ張る場所を裾へとスイツチしている。

渾身の力を込めて美里のトレーナーを握り絞めていた。おそらく何かにしがみ付いていなければ、自我を支えていられない状況なのだろう。

父親が後々鬱陶しいだけの存在となってしまうことは、もはや遺伝子学の分野によって証明されてしまっているが、この、幼児期という最も父親を必要としている時期にそれを失うかもしれないという危機感は計り知れないものがあるだろう。だからこそ、美里は黙って娘達に裾を握らせ続けているのだ。

言うまでもなくもう既に、トレーナーの裾は袖に負けない程にピロピロだ。学人が検査室に入ってから、一分、二分と時間のみがいたずらに過ぎていく。その間にも、トレーナーの裾の長さは増し、それと反比例して美里自身の精神は瞬く間に擦り減らされてしまう。とにかく早く出てきてほしい。彼女の頭の中は、もうその思いで埋め尽くされている。どうしても落ち着いて物事を把握することができなくなってしまうていた。

そんな美里にとって、検査室の扉が開いたのはとても救いになったことだろう。

検査室の扉が開く。執刀医が姿を表すと同時に、真幸、深幸よろしく美里が白衣の裾にしがみ付いた。

「先生！ ガクトはどうなるんですか！？ 助かるんですか！？ 助かるんですよね！？」

取り乱す美里とドクターの間に、代表通訳が割って入る。そして、今の美里の言葉を冷静に英訳してドクターへと伝える。

ドクターは通訳に英語で言葉を伝えていた。言葉の端々にグッド、ベスト、アンビリバボーなど期待値の高い言葉が混じっている。

《良かった……、助かるんだ……》

言葉から察するに、断定しても良さそうな雰囲気だ。安堵の気持ちで一気に脱力した美里は、物凄い音を発してその場に座り込んだ。安心しきって、呆けたように微笑みを浮かべながらあさつての方向を見ていた美里は、ドクターの【バッド】という言葉で現実を引き戻される。

これを境に、ノット、ドントといった否定系の言葉が飛躍的に増した。命は助かる、だが、なんがしかの障害が残る。ドクターの言葉はおそらくそういう類のものなだろう。通訳の顔色がみるみる青くなっていくのが傍目にもよく解る。

学人の身柄が慌ただしく検査室から搬出されてきた。これから手術室へと向かうのだろう。ドクターは座り込んでいる美里の手をそっと取り、

「ドリームズ、カム、トゥルー」

一言告げて、学人と共に手術室へと駆け出して行った。

通訳は、浮かない顔をしている。否、実際はそれどころの話ではなく、現状では美里以上に取り乱しているといっている。胸にきつく手を押し当て、何度も何度もしつこいぐらいに深呼吸をしている。そんな彼の様子を見て、美里は全てを察してしまった。

《下半身不随だ……》

この結末。得たものが大きく、希望に満ち満ちていた筈の今回の遠征で最後に得たもの。それがこれなのだというこの、哀れで、悲惨で、救いようも無い悲劇を意識を取り戻した学人にいったいどうやって受け入れるというのだろう。

《無理。そんなの無理に決まってる……》

そんな折り、漸く気持ちが悪く落ちて着いてきたのだろう、通訳が報告に来た。

「小野さん、何と云えばいいのか正直解りませんが……」

「二度と自分の力で、地に立てなくなっただんですね」

慎重に言葉を選ぼうとしている通訳に、逆に美里から自分の予想を投げ付ける。とにかくもどかしい。言葉を待っているその時間が、美里にとってひたすらもどかしく感じてならなかったのだ。だからこそ、先手なのである。

「その通りです」

どうやら取り乱した美里に当たり散らされることを想像していたらしい。余りにも冷静な対応に、通訳は落ち着きを取り戻すことが出来たようだ。

「私もドクターと同意見です。ドリームズカムトゥルー。傍目には夢物語にしか見えないようなことでも、信じていればきっと叶います。我々が諦めなければ、きっと彼がまた立って歩けるようになる日が来てくれますよ」

座り込んでがっくりと頭を垂れる美里の肩に、通訳はそっと手を添えた。

十球目 子供達の覚悟

【ドリームズカムトゥルー】夢はきつと叶うという意味の英文。

夢を打ち砕かれた者にとつて、あまりにも酷な励ましの言葉である。今手術台の上で頭蓋内出血と闘っている想い人の夢は、決して自力で立ち上がり、歩行することではないのだ。

それが解り切っているだけに、美里は複雑な気持ちになってしまっていた。【死なないでほしい】という気持ちと、【死んでほしい】という気持ち。この相反する二つの感情が入り乱れているのである。

最愛の人。その気持ちは、結婚から六年経った今も変わらない。変わるわけが無い。何度も結婚を拒まれ、それでもしつこく追い回して結婚をせがみ続け、ようやくと相手を口説き落としたのは美里のほうなのだから。

学人の作詞作曲によるシュバルツ応援歌【白を際立たせる色は黒】の中にこのようなフレーズがある。

『野球園から勝鬨が拳がり

黒い空を埋め尽くす

黒い軍団がダイヤモンドを駆け巡り

黒い波がスタンドにほとばしる

内と外が一つになったとき

赤い炎が宙に舞う

この瞬間が好きだから

勝鬨のため力を尽くし

その勝鬨に力を尽くす

内と外が一つになれる場所それが沖縄野球園
そしてそれが沖縄シュバルツ』

学人が入団した六年前、シュバルツが初の日本一に輝いた時の様子を描いたものである。この想いを彼はもう、遂げることが出来なくなってしまうのだ。

《かわいそう……。活躍はこれからだつてのに》

数々のテストを経て漸く完成した、不沈潜水艦小野学人号。その潜水艦は、完成したそばから壊れてしまった。こんなとき、自分は人生の伴侶としてなにをするべきなのだろう。

手術室前のランプが赤く光っている。だが……。そこから出てくるのは、既に死んでいる学人なのだ。野球を失い、下半身をも失ってしまった。夢と生活基盤の一部を纏めて失ってしまった生ける屍なのである。

真幸は深幸と共に、美里のトレーナーの裾をビロビロに伸ばすほど、力強く握り込み、かつ、思い切り引つ張っていた。下方から見上げる母親の様子。その仕種からは例え幼稚園児であっても容易に想像できるほど明らかに不安がっている。否、怯えている。

「ママ、きつとパパ大丈夫だよ。だって先生、ニコニコしながらボクの頭ナデナデしてくれたもん」

真幸なりに精一杯の言葉をかける。母の不安や怯えは正直自分のそれをも引き出してしまうのだが、幼いながらも、それを既に克服していた。

「パパは凄いピッチャーだった。だから、ボクも負けられないようなピッチャーになるからね」

美里は目を見張った。理解している。自分の父親が今どうなっていて、そして、これからどうなるのか、こんなに幼いのに、しっかりと理解している。

そして、自分の不安を見抜いて真幸なりに、言葉は足りないながらもしつかりとフォローしようとしてくれた。

《駄目だな、あたし。あたしがしつかりしてなきゃいけないのに…》

自分と二周りも歳が離れている相手からの懸命な励まし。なんとかしてもここを踏ん張らなければならない。

「うん、そだね。ママが助けてあげないとね」

まだその身体は小刻みに震えているが、気持ちはかなり落ち着いて来ている。少なくとももう死んでほしいという気持ちは無くなった。それだけでも真幸が果たした役割は大きいといえる。

「ありがとう、マユちゃん」

にこやかに笑いかけながら、美里は真幸の頭を優しく撫でた。

深幸は、逆隣りに居る真幸へと向けた笑顔によって母の不安は去ったのだということに完全に理解した。まだ震えているものの、それも微弱なものへと変わっている。

「ママ、パパが立てなくなっちゃっても、ママとマユちゃんとミユで頑張つて助けてあげればいいんだもん」

涙目にはなっていたが、幼いなりにはつきりした口調で意志を表明する。そして、こつ繋いだ。

「今までいっぱい助けてもらったもん。これからはミユ達が助けてあげなきゃ」

覚悟は固まっていた。母の様子から、父の下半身は死んだのだという事は察しが付いている。立って歩けなくなるだけ。それなら、自分が足代わりになってあげよう。それが深幸の考えだった。

実際にはそれほど簡単な問題ではないのだが、実際問題として、小学校卒業ぐらいまではそれぐらいしか出来ることが無いだろう。

「じゃあミユちゃん、マユちゃん、一緒に頑張ってこ」

美里が感謝の泣き笑いを両脇に振り撒くと同時に手術中のランプが消え、手術室から執刀医が姿を現した。

十一球目 閉ざされた夢への扉

手術が終わり、執刀医が姿を見せる。それを見つけた代表通訳が、経過を聞きに向かつて行く。

それを見つめる美里の顔からは、ありありと緊張の色が窺い知れる。待合所の空気は、彼女を中心に緊張感の渦に叩き込まれたかのように張り詰めていた。

両脇には、幼子。一人は小刻みに震え、もう一人は、涙を流している。

その幼子達の頭を優しく撫でている美里自身もまた、小刻みに震えていた。

代表通訳が医者との面談を終え、美里の元へと運命の言葉を告げに帰ってくる。そう、

「一命は取り留めました。生命を救う手術は成功です」

という言葉と、

「でも……、やはり小野選手の下半身は、不随になってしまったそうです」

という言葉を。

解り切っていた筈ではあったが、こうして直に報告を上げられると美里の震えはいっそう激しくなり、涙が滝のように溢れ出てきた。そのタイミングで試合を終えた日本代表の選手達が病院へと駆け付けてくる。

「どしたんなあ、美里ちゃん！？ ガツくん去んでもたんか！？」

声も無く大泣きしている美里を見て、一番始めに学人の死を疑ったのは、四番を打っていた剣持和俊だった。地元中国弁丸出しで畳み掛けてくる。

「でも、命は助かるようなこと言ってますでしたっけ？」

落涙によって言葉を発することの出来ない美里に代わって、学人と同じ沖繩シュバルツの投手である門倉慶輔が、美里の肩を狂ったように揺さぶっている和俊に説明する。

その間を割って入るように今日の試合で先発した宇都宮ノワールの大榎貴志が、

「済みません奥さん！俺がピリツとしなかったばかりに、こんなとんでもないことになってしまっ……」

と美里に対し、深々と頭を下げる。

そこに、澄み切った甲高い声が割り込んできた。

「パパは生きてるってあのおじちゃんが言ってたよ。でも足動かないんだって。だから、ボクが大きくなったら、パパの代わりにシュバルツで投げるの」

主は、真幸だった。幼子は、叶わぬ夢と共に学人が置かれている状況の全てをさらりと語ってしまった。

一瞬の静寂。この一瞬がどれほど重い静寂であるのか解っていないのは、おそらく真幸本人と深幸の二人だけであろう。

その事実がまた、全てを理解している、真幸がプロ野球選手にならないのだということを理解している美里を、声を出して号泣させてしまった。

突然声をあげて泣き出した母親に驚いてキョトンとしている真幸を見ながら、困った顔で和俊が何かを考え込んでいる。

そして、意を決したように頷いて、真幸へと歩み寄っていった。

「あのねマユちゃん」

「あー、剣持のおっさんだあー」

懐かしい顔に、真幸がはしゃぐ。今でこそチームは違っているが、彼もまた、一昨年までシュバルツでプレイしていたのだ。小野家との親交がわりと深かった和俊に、真幸はすっかり懐いてしまっていたのだ。

和俊を見つけてはしゃいでいる真幸を見詰めながら周りの大人達全てが、大泣きしていた筈の美里ですら、二人に対して哀れみの目

を向けている。

絶対に叶わない夢を持ってしまった幼子と、それを告げようとしている大人。この二人は、おそらく同じぐらい不憫だろう。

なかなか言い出せずにいるのか、黙りこくっている和俊に対して、両手を口に宛てがい、頭を左右に振るジェスチャーで【言うな】と指示する男がいた。

今日、学人のボールを受けていた玉木知昭だ。

無視して真幸に歩み寄って行く和俊を見るに至り、とうとう声に出して

「駄目です」と指示する。

「今、漸くマユちゃんでもプロになれる道が開けてきたんです。マユちゃんが大きくなる頃には、力さえ伴っていれば普通にドラフトにかかる時代が来ている可能性も、少なからずあります」

確かに道は開けている。日本プロ野球機構所属チームではないが、真幸と同じ境遇にある者が、入団テストを経てプロとして採用されたというニュースはまだ記憶に新しいところだ。和俊もこの意見には納得したらしく、

「よし！ じゃあ、おっさんがマユちゃんから一番最初にホームランかつ飛ばしてあげるからねー」

と、真幸の頭を撫でながら激励の言葉をかけた。

「やだやだやあだー！ ボク、おっさんとおんなじチームで投げるうー！」

幼稚園児らしく両腕をブンブンと振って、真幸がかわいらしく駄々をこねる。

「でもねマユちゃん、今はまだマユちゃんはシュバルツに行けないんだってことは覚えといたほうがいいよ。お兄ちゃんもマユちゃんの球受けてみたいんだけど、【女の子は、日本プロ野球機構のチームには、無条件で入れない】んだ」

横から知昭が、駄々をこねる真幸に伝えてしまった。

「ワリヤア、ゆうちゃいけんつちゆうといて、自分でゆうとるつちゆうんはどういうことなあ……、お!？」

やくざ映画さながらの中国弁で和俊が知昭に掴み掛かってしまった。先刻の知昭の言葉によって、一人の幼女の夢が完全に打ち砕かれてしまったのである。和俊が激昂するのも無理の無いことだった。「剣持さんは順番が逆だったんです。いきなり【行けない】と言うより、【可能性は有るけど今はまだ行けない】と言ったほうが精神的なダメージは低く済みます」

知昭の冷静な解答も、激昂している和俊にとっては詭弁にしか聞こえなかったのだろう。

「ワリヤア……。この期に及んで何をほざきよんじゃい!」

知昭の身体を思い切り引き寄せ、握った右手を振り上げてしまう。そこへ、一雙の助け船が滑り込んできた。

「やめてよ二人とも! 今はガクトの心配してあげてよ!」

美里が金切り声をあげたのだ。更に、

「今ガクトには、みんなのサポートが必要なんだから……」
消え入るような声で続け、またしゃくり上げ始めてしまう。

美里の言葉に一触即発状態は解けたものの、代わりにとても重苦しい雰囲気がかかってしまった。【学人の下半身が死んでしまった】その事実が醸し出すプレッシャーは、集まった面子にとって今まで感じたことのない威圧感なのだろう。それぞれが沈痛な面持ちで俯いている。

そんな状況の中、学人の身柄が手術室の中から運び出されてきた。突然襲ってきた故障と学人達の闘いのゴングが、今、鳴り響いたのである。

十二球目 それぞれが目指すサポート

学人はまだ、とても安らかな顔で眠っている。その身に襲い掛かってきた惨状を、全く感じさせないほどに安らかな彼の寝顔を見つめる顔は七つ。小野美里、小野真幸、小野深幸といった、学人の家族達に加え、剣持和俊、玉木知昭（沖縄シュバルツ）、門倉慶輔（沖縄シュバルツ）、大榎貴志（宇都宮ノワール）といった日本代表から代表してきた四人である。ちなみに今、代表通訳である高波兼継は、医師からいろいろと詳しい説明を受けるため、席を外していた。

出来ることなら、このまま眠り続けてほしい。これが今、安らかに寝息を発している夫を眺めながら考えていた偽らざる本心だ。この試合で何かを、彼の野球人生を劇的に変えるきっかけとなれるレベルの何かを掴んでいたことは、マウンドで踊る学人を見ていたらすく解った。

そんな時に、あの悲劇である。人生の絶頂期で急没落するのも辛いが、絶頂期を迎えられる手応えを感じ取ることが出来た瞬間に、突然没落してしまうほうが精神的なショックはきつくなる。そして学人は、まさにそのタイミングで没落してしまったのだ。

《無理だよ……、あたしにはフォローできないよ……》
どうしても自信が持てない。そしてその思いは、口から声としてではなく、目から涙となつてとめどなく溢れ出てしまう。

和俊はどうにも自然に笑えない。こんな時ほど明るく接さなければ、そう思っている。だが、それは無理な相談というものだった。明るくなど出来る訳がない。ただ笑うだけでも、これほどの無理を自分自身に強いなければならないのだ。明るく振る舞うなど、土台無理な話なのである。

自分の存在は学人のサポートには向かない。それはもう確定だろ

う。ならば……。

「美里ちゃん。俺に出来ることなら何だっして見せるから、何でも相談してくれな」

そう、和俊は学人以外の小野家の連中のサポートに回ることにしたのだ。そうすることで間接的に学人を元氣付けることにも繋がる。感情の起伏が激しい自分に向かない本人のサポートは家族やクールな知昭に任せて、自分はそのサポート系のサポートを中心に立ち回る、いわゆる縁の下の力持ちというやつである。

「金の相談にもいつでも乗るからな。融資率80%、無利息無担保だから、剣持金融、お気軽にご利用ください」

剣持金融とは言ったものの、返してもらおうなどは少しも考えていない。今の段階で総資産は50億円近くまで貯まりまくっているのだ。和俊としては、融資ではなく投資するつもりでいるのである。

「そうですね。私としても皆さんへの協力を惜しむつもりはありません。学人君の快復を全力でサポートさせて頂きます」

知昭が和俊の言葉に乗ってきた。空気が和俊の狙い通りに流れている。

「美里さん。金とか物なら任してくれ。俺の実家は日本最大の岩倉財閥だ」

かつて経済界には【西の門倉】【東の岩国】といわれる二大財閥が存在した。そのうちの岩国グループを最終的に相続することとなった岩国樹里愛が、前相続者の岩国神奈の遺言によって門倉家に養女として引き取られることによって、この二大財閥が合併したのである。ちなみに発言者である慶輔も、岩国系だった。

残念ながら、和俊の金銭面でのサポートはなくなってしまった。この大恐慌の中にあっても、岩倉財閥の総資産は10兆を優に越えているのである。

「剣持金融、本日を持って倒産しました」

和俊が金銭面でのバックアップからの撤退を、いかにも彼らしい

言葉で宣言した。

「いや、俺は歯車じゃないですから、動かすまで時間がかかると思
うんです。それまでの繋ぎを剣持金融さんにお問い合わせできますか？」

「はあ？」

「だあかあ、俺が幸奈ちゃんに会社動かしてもらって、金工面
してもらってる間、俺の名前でオツサンから美里さんに金都合して
くれ、そして、こっちの金が出来上がったら利息付けて俺がオツサ
ンに返してやるって言ってるんですよ！」

幸奈というのは、今正式に岩倉財閥を動かしている総帥で、門倉
十兄弟の長女だ。御歳なんと24。とんでもないやり手である。よ
く考えると、組織が巨大化すればするほど動きが鈍くなってしまっ
たのはもはや、自然の法則である。必要なときに必要な額が入って来
なければ融資というのは意味が無いのだ。

「よし解った。でも剣持金融は無利息無担保だ」

年棒十億円プレイヤーと日本一の大企業のコラボレーションであ
る。金銭面でのサポートは万全だ。ちなみに、先刻から話に参加し
ていない大槻は学人に張り付いて様子を見守っている。

これもまた、大槻なりの気配りなのだろう。明らかに動揺し、そ
して学人と関わることを怖がっている美里に代わり、自分が積極的
に学人へと関わっていきこうという姿勢だ。

「なんだか知らないけど、マユ絶対シユバルツで投げるからね！」
突然真幸の声が割って入ってきた。

どうやら彼女は先程の知昭の話は、ほぼ理解出来ていなかったらし
い。

それはそれで良かったことなのかもしれない。野球を始めさえす
れば、プロへの道が開けるかもしれないのだから。深幸は母親の背
中を撫でている。白い白い無機質な壁に取り囲まれた病室は、否が
応にもそこにいる全ての者から冷静さを削ぎ落としていく。深幸が
その白い障気に毒されずに済んでいるのは、おそらく彼女が幼いか
らなのだろう。

この時、病室にいた大榎が、満面の笑みを浮かべながら引き戸のレールに躓いて豪快に顔面から転倒した。

「ど……、どうしたんですか、大榎さん……？」

と、呆気にとられた慶輔が聞くと、いよいよこの言葉が返ってきた。

そう、

「小野君が目え醒ましたぞー！！」

という返事が。

十三球目 学人のスイッチ

いよいよ運命の時がやってきた。学人が意識を取り戻したのである。本来ならば喜ぶべきことなのだろう。最愛の人がこの世の縁から生還したのだから、美里にとって嬉しくない筈が無い。

が……。

当の美里はどうしても憂鬱な気分になってしわすにはいられなかった。せつかく生きて還ってきた最愛の人を自分の言葉で絶望の縁へと叩き落とさなければならぬのである。

だからといっていつまでも学人の目から逃げ続けている訳にはいかない。いつか近いうちに必ず告げなければいけない時が来るのだ。【あなたの下半身は死んでしまった】と。さっきまでの段階で既に押し潰されそうになっていた美里の精神力が大槩の一言によって完全に潰れてしまう。もう、今の彼女には、かろうじて平常心を保つのがやっとだった。

「美里さん、しっかりしてください。あなたがいつてあげなくてどうするんです」

見かねた知昭が、半ば放心状態の美里の両肩を揺すりながら励ます。ここは美里以外の者が出る幕ではないのである。

ようやく覚悟を決めた美里は、薬品臭が漂う病室へと一歩足を踏み出す。一歩動いてしまえば、後はもう前へと進むだけだ。自然と早足になっていく。元々は待ち侘びていた瞬間である。その顔には、満面の笑みが張り付いていた。

「お帰りガクトオー！」

満面の笑みに涙を湛えた美里が上体を起こしている学人に飛び込むように抱き付く。

「おいおい、いってーなあ。もうちょっと病人をいたわってくれよ

な」

あまりにも強烈なスキンシップに学人が苦笑いを浮かべた。確かにこれは、生死の縁から還ってきた者に対しては強烈なパフォーマンスだろ。

「なんか美里の泣き笑いつて初めて見たなあ。心配かけてごめんな」めったに嬉し泣きをしない人が、人目を憚らず泣いているのだ。彼女の一番魅力的な表情である満面の笑みを浮かべて。

《今まで直ぐ隣にいるのが当たり前だったからあんまり意識してなかったけど、美里つて相当綺麗な人だったんだな》

初めて見る未知の美里に改めて惚れ直した学人は、胸に秘めていた思いを口に出した。

「なあ美里、俺の足つて、麻痺じゃないだろ。多分もう、神経が繋がってねえんだ」

「えっ!？」

「解るさ。俺の足だぞ。布団被ってるのに脛に感触ねえし、ベッドに引っ付いてるのにふくらはぎにも感触ねえし。それよりなにより、動け! って思ってもちつとも動かねえしな」

苦笑いしながら学人が答える。

《何だろ。何この人はヘラヘラ笑ってるんだろ》

今までの自分の心配はいつたいなんだったんだろ。そんな思いが急速に美里の心の中に広がって行く。学人のあまりにもサバサバした態度に、安心を通り越して怒りを覚えてしまった。

本気で怒った表情を浮かべて、学人の腹部に軽い正券突きを喰らわす。

「あんまりヘラヘラしないですよ。本気で怖かったんだからね、あなたにそれ告げるの……」

「怒ってる顔も結構綺麗だな。その顔見られるなら、もっと怒らすようなこと言ってもいいかな」

「ぶざけないで」

決してぶざけたことを言っているつもりはない。この決心を告げ

ると、今の美里なら気が触れてしまいかねないほどショッキングなことを学人は言おうとしているのだ。

「落ち着いて聞けつてのが無理な事は解ってる。俺次にすつつつげえひでえこと言っぞ。俺に【足死んだ】って告げようとしたときと同じぐらいの覚悟しといてくれ」

「なによ、おまえ殺して俺も死ぬとか言う気なの？」

本当はこんな事は言いたくない。だが、お互いの生活がかかっているのである。嫌々ながらも、どうしても切り出さなければならなかった。

「多分美里にとってはそれよりひでえことだと思う。なあ、俺達……、別れようか……」

《—》

突然の申し出に、美里は絶句した。目に見える状態の変化としてまずは涙の量が倍ぐらいに増す。

訳が解らない。いったい何がいけなかったのか、美里には思い当たる節が全く無かった。

「そりゃ……、あたしだつて完璧な妻じゃないよ？ でも……、いきなり【別れる】はちよつと酷いんじゃないの……？ 嫌なところがあるんなら言つてよ……。あたし、出来る限り直すからさ……。……ね……？」

これが彼女に出来る最上級の返答だった。全く訳が解っていないのだ。これ以上の返答など、出来る筈もない。

「いや、美里が悪い訳じゃねえんだ……」

学人の説明は最後まで続かなかった。

「悪くないならなんで！？ そんなに生理的に受け付けられないなら、告つた時に振つてくれたらよかつたじゃないの！」

もはや話し合いが通じそうにないほどの興奮状態に陥ってしまった美里に言葉を遮られてしまったのだ。彼女は今、必死なのだ。最

愛の人から捨てられまいとして必死なのである。そんな美里に、それは全くの逆効果なのであると気付ける筈もない。

「いや、だから……」

「いやだから!? 嫌だからって言ったの今あ!? そんなに嫌なら殺せばいいでしょ!」

殺せという言葉に反応したのか、病室の外にいた連中が

「おい、どうした!?!」

と血相を変えて飛び込んできた。突然の外野の闖入に、

「みんな、助けて! ガクトが別れるとか訳の解んないこと言うのお!」

と、ヒステリックに喚き立てて、ここぞとばかりに加勢を求める。こうして学人対それ以外の舌戦が勃発してしまったのだ。

十四球目 美里のスイッチ

異国の地で突如勃発した学人对それ以外の舌戦。その元凶は学人の【別れよう】という言葉である。そう言われることに全く身に覚えのない美里が、周囲を巻き込んで必死の抵抗を試みているのだ。

常軌を逸し気味の美里が叫んだ『殺せ』という言葉に思わず反応してしまった貴志だったが、病室に駆け込んだ後に悔やむことになってしまった。彼らの姿を見た途端に美里が言った言葉が、

「みんな助けて！ ガクトが別れるとかって訳解んないこと言うのお！」

というものだったからだ。要するにただの夫婦喧嘩である。そんなものに巻き込まれては堪った物ではない。他のメンバーを見ても大なり小なりその感情が窺える。

「なあガクト、それおかしいんじゃないんか？」

まず始めに口を開いたのは和俊だった。球界五のイケメンだと言われているその顔に、呆れ果てた表情を貼り付けている。ちなみに総合調査会社アジティック統計による日本プロ野球界イケメンランキングは、

五位、元沖縄シユバルツ剣持和俊

四位、なし

三位、爪落兄弟（兄、宇都宮ノワール、弟、旭川マーベラス）同票
二位、宇都宮ノワール門倉翔太

一位、沖繩シュバルツ門倉慶輔

となっている。

「訳も全く説明せんで、いきなり【別れよう】は無かるうが」

「いや、違うんすよ剣持さん！ 説明しようとしても美里がアーだこーだ言っただ聞いてくれないだけなんですって！」

静粛厳守な筈の病院内に、重病人である筈の学人の叫びが響き渡る。

「落ち着いてください学人君。他の患者さんの迷惑になります」

と知昭がとりなすが、

「おまえは人ん家の事情に口出して来んじゃねえ！」

と取り付く島も無い。

「ワシに出すなゆうて言わんかったちゆうことは、ワシは出してもええつちゆうことよのう……」

学人は昔から和俊に頭が上がりません。ルーキーイヤーにこっぴどくどやしつけられたことがあり、それ以来和俊の子分のようになっていた。その和俊が、学人に説明を促す。

「まずどうゆうことなんか訳を説明せんかいや」

説明の義務を負わされた学人はチラツと美里に目をやり、彼女を黙らせておいてくれと周囲にアイコンタクトで懇願しながらぼつぼつと心境を語り始める。

「俺もう野球出来なくなつたじゃないですか。だから、職探しから始めなきゃいけない訳ですよ。でもこんな体じゃないですか。簡単に見つかる訳無いじゃないですか」

「そげなもんCD出しゃええだけの話なんじゃないんか。別に声出んようになつた訳じゃないんじゃけえ」

確かに和俊の言う通りで、学人は毎年シーズンオフに音楽活動を行っている。発売したCDの中には、百万枚を超える売り上げを記録した曲もいくつかあり、下半身が不自由になつたからといって所属レコード会社が彼を切るということはほぼ考えられなかった。だが、学人が心配しているのはそんなことではなかったのだ。

「あのね剣持さん、プロとしてやるからにはそれにとまなうドサ回りが付いて来るんですよ！」

どうしてもプロとして活動するとなるとライブを中心とした営業回りが必要となるのである。学人の心配はそこだった。外回り営業で生計を立てるには、いかせん機動力が低すぎる。

「そんなもん、ZARDみとくにMC下手じゃけえゆうてライブせんアーティストになりやえかろうが。だいたいワリヤあ今までだつてろくにライブなんぞしたこと無かろうがーや」

心配の種はまだあった。完全な人気商売であるため、いつ稼げなくなるかわかったものではないということもあるし、幼稚園児二人を抱える身として、彼女らの学費の心配もある。一家を支える大黒柱として心配しなければならぬことが山程あるのである。

「そんな簡単な問題じゃ……」

「もういいよお！」

なおも抵抗を試みる学人の声に、悲痛な金切り声が割って入った。「もういい。もう解ったよ。剣持さんももういいです……。あたし、別れます……」

強く手を握り締め、俯いて震える美里の姿は、哀しんでいるといふより、寧ろ怒っているような雰囲気を醸し出していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5108b/>

スイッチ！

2010年10月14日15時07分発行